第21回　会員便り

ともに学ぶ

黒瀬勝久

「彼らは、日本語が喋れないだけで、他のことは君たちより優れているかも知れない、そのことを忘れないでほしい」

私が６５歳過ぎて日本語教員養成課程の大学の授業で教官から言われた言葉です。日本にいる外国人の為に、力になりたい・・と思っていた「上から目線」の考え方を、打ち砕かれました。

実際の日本語教室はどうなのかと、見学したのが山梨県立大学のボランティア教室でした。時々補助的な手伝いをすることになり、そこで、外国人に正しい日本語を教えることの難しさを知りました。

大学の授業は多岐に渡り、聞いたこともない教科に戸惑いつつもなんとか単位を習得し、卒業の資格がとれましたが、留学生相手の演習の授業で、実際の教室運営の難しさ、シラバスの作り方、中間言語をどこまで使うのか等々・・を実感して、放りだされました。

そして、たどり着いたのが「山梨日本語ボランティアの会」でした。何年も、関わっている方々が、日本語だけでなく文化交流にも尽力されている姿に感動しました。しかし、どうしてよいか解らないまま、１年が過ぎ、最初に受け持った学習者の方は、知人がＣＥＯをしている会社のドイツ人研修生でした。

「短期の滞在であること、折角日本に居るのだから、少しでも日本語が話せればよいこと」・・気軽に学習が出来ると甘い考えで、はじめました。

欧米人、いやドイツ人独特の「何故？」「どうして？」質問の連続です。いちいち答えていると、カルキュラム通りにいきません。おまけに難しい質問を英語でしてきます。「英語を喋らなければ良かった」との後悔は、既に遅く・・「興味はあるけど、覚える気がない」開き直ってサバイバルだけに絞りました。「何故？」にはちゃんと答えていきました。結果的には私の「日本語力」の向上に役立ちました。何度も、大学の教官に質問し、教示を受けました。

学友の半数は、日本語学校の教師や、大学の教員として国内外で活躍しています。個人指導中心のボランティアと違い、一定の成果を求められます。それ

はそれで、厳しい環境下での指導者の資質を求められて、力がつくと思いますが、私には無理です。

次に担当したのが、日本にいる就業者です。学習者は複数で、レベルはまちまちです。国もスリランカとセネガルの方です。

もちろん彼らの母語は喋れません。英語を理解する学習者は１名です。授業は日本語で通しました。難しい語彙はＰＣの翻訳ＳＯＦＴを使いました。

幸い、一人は日本語が理解できるので、語彙の通訳も頼みました。基本はサバイバルの文型を学習する形をとり、テキストも必要なところをＣＯＰＹして渡し、ひらがな、カタカナ表を壁に張って、そこから探してもらう様にしました。結構、成果が出てきた矢先、通訳係りの彼が帰国！！

替わりにきたのが、学習者の長男で高校生。目標は、Ｎ２合格！！
日本語はもちろん、英語もあまり話せません。少し、やったのですが会社が彼を日本語学校に通わせるというので、その補助授業をすることに。
「みんなの日本語」が教科書ですが、スピードが速すぎて付いていけません。
結果は、宿題の回答を求めてきます。LINE、SKYPE を使っていつでも回答してきたのですが、帰国してしまいました。

替わりに会社のＢＯＳＳから文字を教えて欲しいと依頼。彼は、日常の日本語は理解し、上手に喋れますが、文字はひらがなを含めて読み書きが出来ません。　また、難問です。しかし発音できれば意味がわかります。昨年の研修会「漢字を教える」が役立っています。

今は、学習者を通して彼らの国の文化習慣を知ることが出来たことがなによりも宝物です。